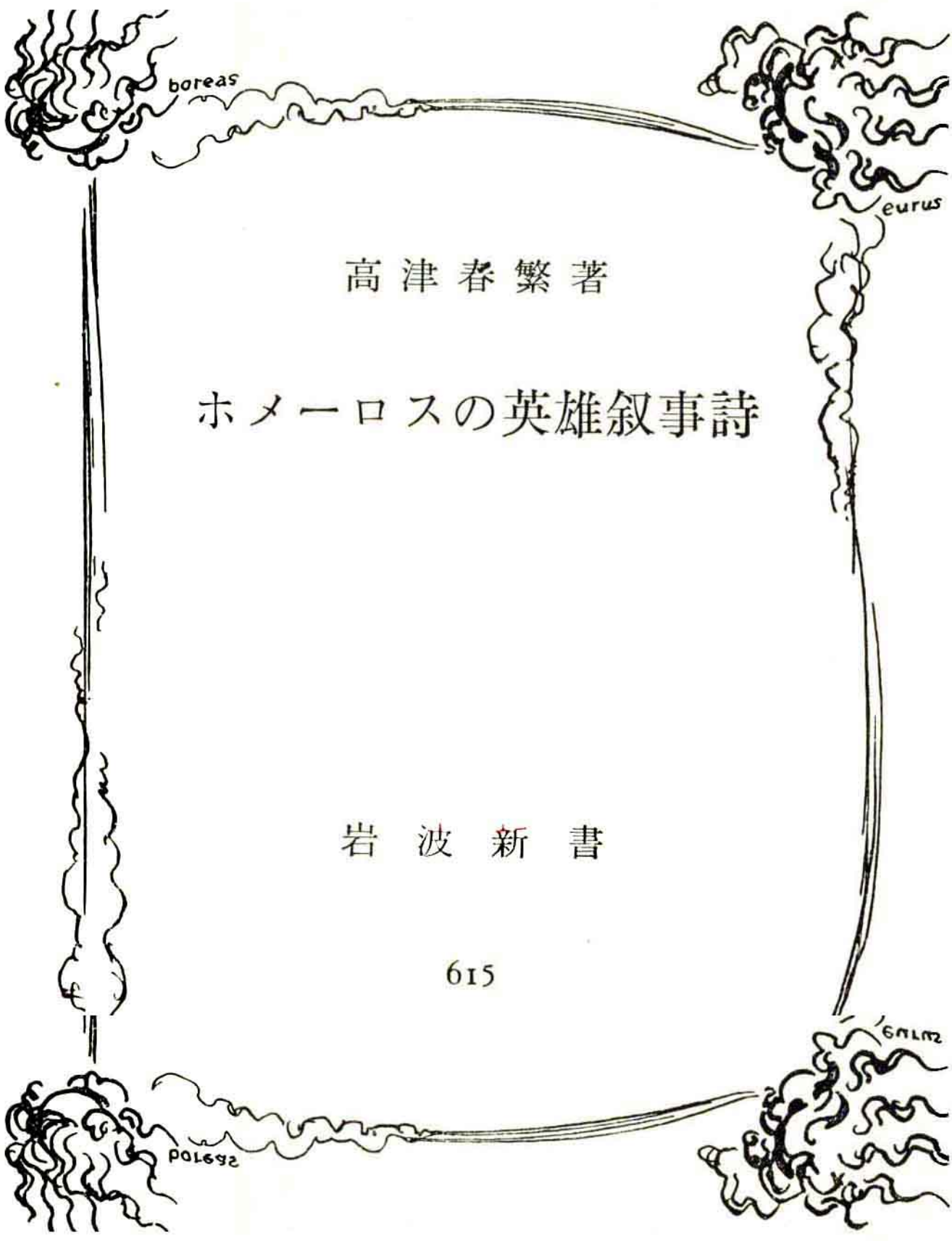


高津春繁著

ホメーロスの英雄叙事詩





高津春繁著

ホメーロスの英雄叙事詩

岩波新書

615

高津春繁

1908年—1973年

1930年東京大学文学部卒業

専攻—ギリシア語・文学，言語学

著書—「ギリシア神話」(岩波新書)

「古代ギリシア文学史」

「ギリシア民族と文化の成立」

「比較言語学」

「ギリシア語文学」

「アルカディア方言の研究」

「ギリシア・ローマ神話辞典」

「古代文字の解説」(共著) 他

訳書—アポロドーロス「ギリシア神話」

アリストパネース「女の平和」

ホメーロス「オデュッセイア」 他

ホメーロスの英雄叙事詩

岩波新書(青版) 615

1966年12月20日 第1刷発行 ©

1982年9月10日 第14刷発行

定価 430 円

著 者 高 津 春 繁

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

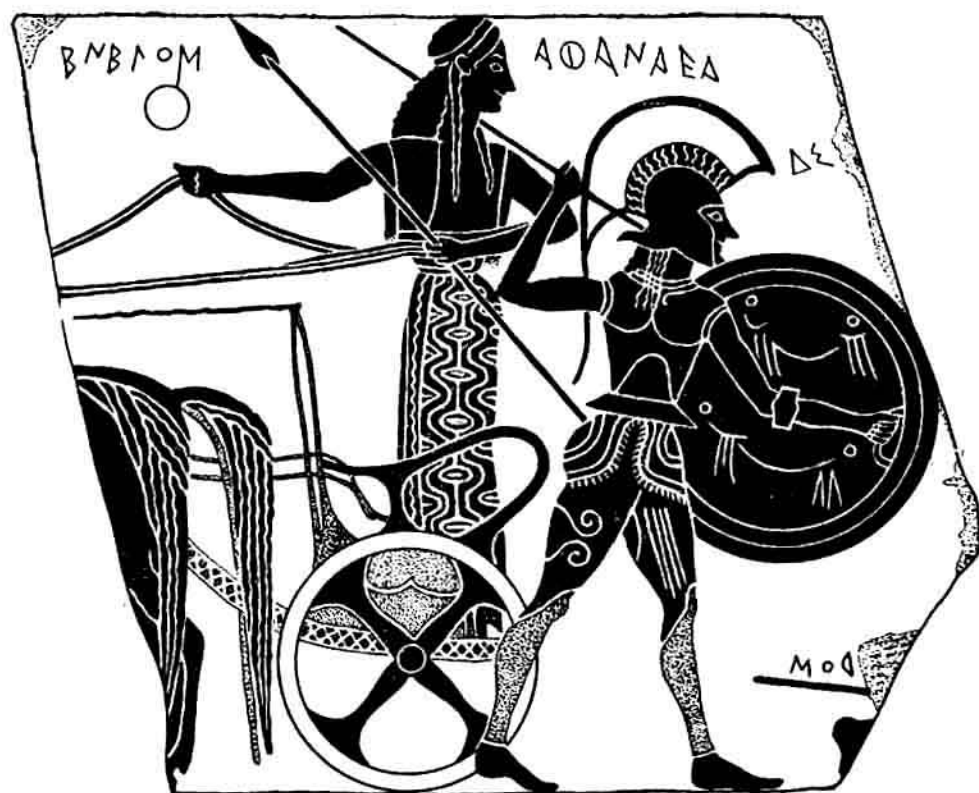
振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次



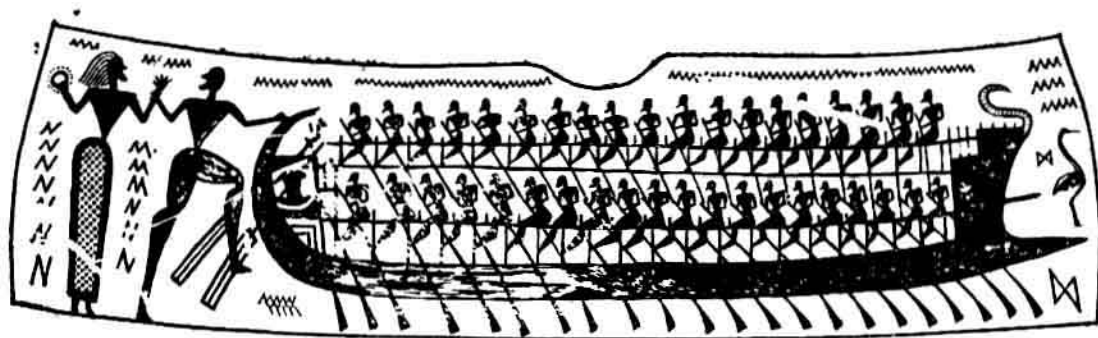
アテーナーとディオメーデース(紀元前 560 年頃)

一	古代ギリシアにおけるホメーロスの評価	1
二	ホメーロスの伝記	9
三	トロイエーをめぐる英雄叙事詩群	19
四	ミューケーナイ時代とその文化	59
五	暗黒時代	87

六	ホメーロスの叙事詩の成立・・・・・・・・・・・・・・・・	107
七	ホメーロスの社会・・・・・・・・・・・・・・・・	163
八	ホメーロスとミューケーナイ時代の社会・・・・・・・・	179
九	英雄の世界・・・・・・・・・・・・・・・・	187
十	再びホメーロス・・・・・・・・・・・・・・・・	205

一

古代ギリシアにおけるホメーロスの評価



ヘレネーの誘拐(紀元前八世紀後半)

ギリシア英雄叙事詩を語るにあたつて、まず心に浮ぶのは、ホメーロス作と伝えられる二つの叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』であるが、この二つの作品を論議する前に、古代のギリシア人がホメーロスとその作品に関してどんな風に感じていたか、また思っていたかを簡単ながら話しておかねばならない。

ホメーロス Homeros の叙事詩は、古代のギリシア文学の中でも甚だ特異な位置を占めていた。まず第一に、これら二つの英雄叙事詩はギリシア文学最初の作品でありながら、その最大傑作である上に、『イーリアス』Ilias は一万五千六百九十三行、『オデュッセイア』Odysseia は一万二千百十行より成る長篇であつて、ギリシアの他のいかなる叙事詩よりも長いこと、第二にギリシアのその作品が伝わっている詩人はすべて歴史的にはっきりとした姿をもっているのに、ホメーロスだけは、彼と並び称せられたいま一人の叙事詩人ヘーシオドスとともに、紀元前五世紀にはすでに伝説の霧に包まれた人物となつていたこと、第三に彼の作品はギリシアの民族的大叙事詩として、それだけで特別なクラスと見なされ、ほかのあらゆる文学作品とは別の、いわば神聖な地位を与えられていたこと、がそれである。

ここでは、上に挙げた順序を逆にして、最初に第三の点を取りあげることとする。

古代ギリシアでは、子供たちは寺子屋式の学校に通つて、算数と読み書きの手ほどきを受けたことは、どこの国の学校とも同じであつたが、彼らが一応文字を習い終えたと、次には詩人

の作品を読んだ。紀元前四世紀前半に作家として活動したクセノポーンの『家政論』（二四・六一七）によると、教師は、道德上のよい忠告や訓戒や昔の偉人たちの賞讃をまじえた話を含む詩を生徒たちに与えて、これを暗記させる。それは子供たちがそこから教訓を得て、自分たちもまたそれにならうようにするためである。

クセノポーンのこの言葉は、当時の小学校における文学の学習が、単に文学の鑑賞そのものだけが目的ではなくて、第一の目的はむしろ、詩人たちの作品から人間としての立派な行動の手本を引き出すことにあったことを示している。そして、それを、完全な暗記という方法で身につけさせようとしたのである。この方法はプラトーンもまたその晩年の作『法律』（八一二）の中でアテーナイ人の口をかりて勧告している。

そして、この際に、万人の手本となるべき道德上の教科書として、とくに選ばれたのが、『イリアス』と『オデュッセイア』であった。ギリシアの子供たちは、ごく小さい頃からこの二つの叙事詩を、ちょうど日本の子供がかつて漢文の素読をさせられたように、繰り返し読まされたか、或いは聞かされて、覚えこんだのである。また実際にこの二つの長い詩を完全に暗記していた人が普通の市民の中にもあったことは、クセノポーンの『饗宴』の伝えるところによって知られる。この中で、ソークラテースの問に答えて、ニーケーラトスは次のように言っている。

「わたしの父親は、わたしを立派な人間に仕立て上げるために、ホメーロスを全部暗記する

ことを命じました。そして、わたしは今も『イーリアス』と『オデュッセイア』の全体を暗誦出来ると思います。」

もちろん、普通人以外に、当時は、日本の琵琶法師に似た、職業的な叙事詩の語り手があつて、彼らはまち角や広場などの公衆の集まる所でホメーロスを語っており、彼らは、いうまでもなく、ホメーロスを完全に暗記していた。

しかし普通の人が詩を習つたのは、先に述べた道德上の教訓を得るのみならず、詩が自分の民族の物の考え方、知恵、さらには平素の生活の指針となるものを授けるからであつた。アリストパネースは、『蛙』の中で、冥途におけるアイスキュロスとエウリーピデースの二人の全く傾向の違うギリシア悲劇の大作家に文学論争をやらせているが、そこで詩人は、ペルシア戦争の勇士たる愛国詩人アイスキュロスにこう言わせている。

「さよう、これが詩人の務めじゃ。まず初めより見てもみよ。詩人の中で高貴なる人々がいかにかに世のためになつたかを。オルペウスはわれらに秘教儀を教え、殺生を禁じ、ムーサイオスは病の治癒と予言の術を、ヘーシオドスは農耕と実りの時と鋤入れ時を。またかの神々しきホメーロスは、軍勢の布置、勇武、戦士をば鎧よろいう術わざなど、世にもすぐれたる事どもを教えなければこそ尊ばれ、榮譽を得たものではあるまいか。」(二〇三〇—二〇三六行)

ここに挙げられた詩人たちのうち、最初のオルペウスとムーサイオスは伝説的な音楽家詩人で、ホメーロスよりは、伝えによれば、古い時代に属し、オルペウスはオルペウス教という特

殊な秘密宗教の開祖とされ、ムーサイオスはその弟子であるが、二人の作品は残っていない。二人とも北方のバルカンにいたトラキア民族の地の出身で、一種のシャーマン的な巫呪師ふじゆし的性格が強いので、宗教的色彩を帯びているのである。

それはとにかくとして、ここでもホメーロスの位置は、あげられた四人の中では最高とされている。アリストパネースはホメーロスが「世にもすぐれた事どもを教えてくれた」ことを強調しているが、ホメーロスは単に戦争に関する知識の供給者であるばかりではなく、クセノポーンの『饗宴』の中の、ニーケーラトスの言葉が示すように、ついにはあらゆる事柄の教科書と考えられるに至ったのである。ニーケーラトスは、人間の万般の事柄について、ホメーロスがふれていないものではなく、家政、雄弁、武具について学びたいものは、ホメーロスにその教えを仰ぐことが出来るし、馬車の御し方、いや玉ねぎの食べ方までも教えてくれると言うのである(六・六)。

プラトーンは、ホメーロスのみならず、文学作品が人間に与える道德的感化について、否定的な意見の持主であるが、プラトーンもまたホメーロス並びにその弟子である悲劇詩人たちが、単に技術的な事柄だけではなくて、人間の道や宗教に関してすべてのことを知悉していると言われていると伝えている(『国家』五九八)。

またプラトーンは、同じ『国家』(六〇六e)の中で、

「それでは、グラウコーン、ホメーロスの賞讃者が、この詩人こそギリシアの教育者であり、

人間の陶冶と身を処する道に関して彼に学び、この詩人に従って自己の生活全体を規制すべきであると主張する時」

とソークラテースに言わせているのをみると、このような考え方が当時のギリシア人一般に通じたものであることが知られるのである。

プラトンは、しかし、このようにホメーロスや悲劇を認めることには反対し、これらの詩人の歌っているところには、多くの不道德な点があり、かつ道德以外の戦争や政治や、さらには技術の点にまで、ホメーロスをより所とする考え方の誤りを指摘しているのであるが、やはりプラトンは、先に引用したところに引きつづいて、ホメーロスが悲劇詩人中の第一の最大の作者であることを認めている。

ホメーロスの権威はここに留まらず、アテナイとその隣国メガラとがサラミース島の帰属について争った時に、ホメーロスの詩が引用されたし、また紀元前四世紀前半の名高い雄弁術の先生であり、政治的な事柄についても有力な指導者の一人であったイソクラテースも、ギリシアが一丸となってペルシアを撃つべきだと主張したパンフレットの中で、ホメーロスの主題たるトロイエー戦争を引いて、海外に遠征して武勇の誉れをあげるべきであると説いた（『パネーギュリコス』一五九）。

アリストテレースも彼の『詩論』で叙事詩と悲劇を比較しつつ、叙事詩の特性を説き、ホメーロスが他の叙事詩作家たちと比較にならないほど、すぐれた詩人であることを説き、その構

成の緊密さをほめたたえて、『イーリアス』と『オデュッセイア』を題材として悲劇を作ろうとしても、ただ一つか、せいぜい二つの悲劇を作り得るにすぎないのに、ほかの叙事詩からは幾つも作られているし、『小イーリアス』からは八つもの悲劇が作られていることを指摘している（『詩論』一四五九a—b）。ホメーロスはアリストテレースも指摘しているように、叙事詩にありがちな、事件をその発生の順序に従って語ることをせずに、長い十年間のトロイエー包囲攻撃の中の、わずか数十日の間に起った事件を選んで、それに物語を集中して『イーリアス』を歌い、また『オデュッセイア』でも、同じ方法によっているからである。しかもホメーロスはそこから一万余千行に上る大モニメントと言うべき長篇の雄大な作品を作り上げたのである。

このプロットの問題は、後でくわしく説明するが、このほかに、ホメーロスの言葉がまたユニークであって、紀元前五世紀には、はや、普通の人たちは、彼の作品を特別に習わなくては理解が困難になっていたほど、それは古い時代の特殊な言葉や表現にみちみちていた。

彼の作品は、先に話したように、すべてのギリシア人に親しまれていたために、文学に及ぼした影響は深刻で、彼の詩の直接の引用も多いが、間接的な彼の反映が至るところに認められ、これもまたホメーロスがギリシア人の間で占めていた特別な位置をわたくしたちに教えてくれる。

このために彼の研究、彼の解釈は非常に古くから試みられ、文献学がはじめて起った紀元前三世紀から二世紀にかけて、エジプトのアレクサンドレイアで最初の、そして最大の研究の中

心となつたのは『イーリアス』と『オデュッセイア』であつた。ここでこの二つの叙事詩のたくさんの写本が集められて、これを所蔵する大図書館を中心として、多くの学者が写本を校合し、校訂本を出して、正しいホメーロスの再現に努力し、その語彙を研究し、その風俗習慣、戦闘の仕方、人名地名などを細かに調査して、ホメーロスの歌つた英雄時代を理解すべく努力した。これもまた、他に類のないことであつて、ホメーロスがギリシア人の心の中に占めていた大きさをよく物語っている。

要するにホメーロスは、古代のギリシア人の心より所であり、すべての人がホメーロスに幼い頃から親しみ、ほとんど無意識のうちにホメーロスがあらゆる機会に心に浮び、心の糧となつていた。それはプラトーンの対話篇をみてもよくわかることで、ギリシア的生活の根底には常に、よかれあしかれ、ホメーロスが横たわつていたのである。それは彼らの日常の生活から切り離すことの出来ないものであつた。

それでは、ホメーロスなる人物は、どんな具合に当時のギリシア人に受け取られていたであろうか。彼は何者で、どこの人間で、どんな生活をしたのか。

二 ホメーロスの伝記



ギリシア王侯たちを集結するメネラーオス(紀元前 650 年頃)

ホメーロスの伝記と称するものは、幾つか伝わっている。その中でも長いくわしいのは、もつともらしく、紀元前五世紀の、歴史の父と言われているヘーロドトスの名を冠した伝記と、紀元後十世紀の終り頃に作られた、従来はスーイダース著と呼ばれていたが、本当は『スーダ』すなわち「城」という辞典そのものの名称であることが、最近の研究で明らかとなった文学辞典中のホメーロス伝の二つである。このほかにも英雄伝の著者として有名なプルータルコスもホメーロスの伝記を調査して、かなりくわしく書き誌したものがあつたが、これは散佚して、断片が残っているだけである。さらにほかにも二、三の短いホメーロス伝が伝わっている。

しかし、これらの伝記を見ると、とても信用出来ないような荒唐無稽のことがもつともらしく書いてあり、また相互に余りにも矛盾し相反する点が多いので、結局これらの伝記は後世の人が、ホメーロスの作品や伝説を材料にでっち上げたものと考えざるを得ない。たとえばヘーロドトス作と称するホメーロス伝には、ホメーロスの祖父の名から、彼の母親が男と通じて、彼をはらむ話にはじまり、彼の先生で養父フェーミオス Phemios、彼を親切に助けたイタケーの人メンートル Mentor となると、フェーミオスは『オデュッセイア』の中に出て来る吟唱詩人の名であり、メンートルは、オデュッセウスがトロイエーに出征する時に後事を託した親友の名前であるから、これはどうもおかしいと思わざるを得なくなる。

またホメーロスの年代についても、諸説紛々としていて、一致がない。一番古く彼をおく者

は、彼がトロイエー戦争と同時代だとしているが、これは昔のギリシア人の年代の計算によると紀元前一一五九年となる。また一説によると、ホメーロスは英雄神話で名高いヘーラクレースの後裔たちの帰国と同時代だというが、この事件はトロイエー戦争後八十年とされている。また一説ではヘーラクレースの後裔の帰国後六十年でギリシアから小アジアのイオーニア地方への植民が初まったその頃の人だという。

それでは歴史家の説をたずねて見よう。先に挙げた歴史の父ヘーロドトスが、その本物の歴史の中で、ホメーロスについて論じている箇所がある。その中の一つで、彼はホメーロスは自分の時代より四百年以上前ではないと言っている（『歴史』第二巻五三）。また紀元前四世紀前半の歴史家テオポムポスは、さらに時代を下げて、紀元前六八六年という説を出した。

次に彼の生まれた所に関する点はどうか。彼の伝記の中の一つはこう言っている。

「さてホメーロスを、ピンダロス Pindaros はキオス Chios の人、スミルナ Smyrna の人と言い、シモーニデース Simonides はキオスの人、アンティマコス Antimachos とニーカンドロス Nikandros はコロポーン Kolophon の人、哲学者アリストテレースはイオス Ios の人、歴史家エフォロス Ephoros はキューメー Kyme の人と言う。またある者は、キュプロス島のサラミース Salamis の人、ある者はアルゴス Argos の人、さらにアリストタルコス Aristarchos とトラークアのディオニューシオス Dionysios Thrax はアテーナイの人とした。」